

# ベタネタバレンタイン2013

sanukisoba

結局健太は何も言うことができず、香澄の乗った電車は発車してしまった。電車がくるまで30分間もホームで雑談を交わしていただけで、健太は言いたいことを言えないまま。原因は自分でもわかっている。ただ、単純に、勇気がなかっただけ。

香澄が乗った電車が見えなくなると、健太はうつむいたまま改札に向かう。

改札をくぐるとき、駅員がガラスの向こうから健太に声をかける。

「いいのか？」

健太は声に驚いて駅員を見つめる。健太と香澄が産まれた頃から、2人を知ってる駅員だ。いや、駅員だけじゃない。1ヶ月違いで生まれ、その頃からいつも一緒にいた健太と香澄のことを知らない人は、この町にはいない。だからこの町の人皆、香澄が隣の県の大学に進学してしまうことも、そのせいで健太と香澄が離ればなれになってしまうことも、知っている。

「いいのか？」

責めるでもなく、叱るでもなく、いつもの仕事のときの声で尋ねる駅員を見つめたまま、健太は金縛りにかかったかのように動けなくなる。何も言えず立ちすくむ健太を見て、駅員は軽く微笑む。

「外で待ってるぞ」

駅員はそう言って駅の出口を指差し、追い払うかのようなジェスチャーで健太を出口に向かわせた。

駅の出口で健太を待っていたのは、駅長だった。いつも通りの仏頂面で社用車の前に立っている駅長は、健太が出てきたのを見るとボンネットをたたき「さっさと乗れ」と促した。

わけわからず健太が助手席に潜り込むと「俺はこれから市街に用事がある。健太も市街に用事があるって聞いたからな。ついでに送ってやる」と一方的に駅長は告げ、発進させた。

市街というのは健太の町の駅から4駅ほどのところにあるターミナル駅の通称で、隣の県に行くためにはここで電車を乗り換えなければならない。もちろん香澄もこの駅で乗り換える必要がある。そして市街とこの駅の間には電車で行くよりも近い道が存在し、電車で行くと30分かかるところが車なら大体20分くらいで着くのだ。

駅長はもしかしたらわざわざ自分のために……そう思った健太が「ありがとうございます」と半泣きで呟くと、駅長は「おまえのためじゃねえよ」と怒ったような口調で言って、タバコに火をつけた。半泣きの男の子と、タバコをくわえた大人の男を乗せた車は沈黙を乗せたまま市街に近づいていく。

香澄が旅立つ日に思いを告げようと思ったのは健太と香澄の共通の友達である佐緒里が泣きながら健太に訴えたからだ。

「そんなに好きならちゃんと思いを告げてよ！香澄にちゃんと伝えてよ！」

泣きじゃくりながら高校の玄関で叫んだ佐緒里を見て、健太はここで告白しないと絶対に後悔すると思って駅まで来たのに。それなのに……。

健太は駅長の運転する車の中で何度も何度も自分を責め続けた。

余談だが、香澄と健太と、中学校の頃から仲の良い佐緒里は、ずっと健太のことが好きだった。健太が香澄以外の女の子に興味がないことも知っていて、健太のことが好きになればなるほど、健太の香澄への思いがわかって苦しくなっていく。そうした気持ちが泣き叫ぶことにつながったということに健太が気づくことは多分一生ないだろう。

市街に着くと駅長は「ほら。さっさと行ってこい」と健太を降ろし「香澄の電車が出た頃、またここに迎えにくる」と言い残して車を出した。

健太は駅の中を走り回って香澄の姿を探す。地方とはいえそれなりに人の集まる駅でたった1人を見つけるのはそんなに簡単なことではない。健太は香澄が乗るはずの電車が出るホームが一番可能性が高いと判断した。

入場券を買い、改札をくぐり、土産物屋の前を通り、弁当屋の前を通過し、7番線へのエスカレーターが視界に入ったとき、健太は香澄を見つける。香澄は待合所で1人うつむいて座っている。待合所の自動ドアが開き健太が足を踏み入れる。香澄は入ってきた人物が健太だと知り、驚きを隠せない。

健太は黙って香澄の手を取り、人目も気にせず一息で思いを告げる。好きだ、と。たった3文字。1秒もかからずに言い切れる言葉。それでも2人には十分だった。

ありがとう、という言葉を使い終わるか終わらないかのうちに香澄は泣き出す。うれしい、ありがとう、このふたつの言葉を何度も何度も繰り返しながら香澄は涙を止められない。

待合所の人たちがニヤニヤしながら2人を見つめる。

ようやく落ち着いた香澄は「ありがとう。ようやく言ってくれたんだね。ずっとその言葉を待ってたんだよ」と微笑みかける。

やがて香澄の乗る電車が到着し、2人はホームに立つ。

「休みにはちゃんと戻ってくるね。電車で2時間だもん。そんな遠くないよ」  
笑顔を取り戻した香澄はそう言い残して電車に乗る。

電車がホームを離れ、寂しさと、でもどこかうれしい気持ちを抱えた健太が駅を出るとそこには駅長が待っていた。

「帰るぞ」

そう言って駅長が投げてきた缶コーヒーを受け取り、健太は助手席に乗り込む。そして2人が乗った車は、健太と香澄が育った町へと戻っていくのだ。